早稲田大学審査学位論文

博士（人間科学）

概要書

原始・古代日本における勾玉の研究

A study on comma-shaped beads in primeval and ancient Japan

２０１８年１月

早稲田大学大学院　人間科学研究科

瀧音　大

TAKIOTO, Hajime

研究指導教員：　谷川　章雄　教授

本研究の研究対象である勾玉は、出土する分布範囲が日本列島全域にわたり、材質はヒスイや碧玉、瑪瑙のほかにも琥珀やガラス、金、土など多様性をみせている。また、勾玉は形態や材質、その意味などの変化は置いておくとして、縄文時代から奈良・平安時代、そしてそれ以降の時代というように、長期的且つ継続的に人々の生活の中に溶け込んでいた事実は、他の考古遺物を見渡しても稀有な存在といえる。

勾玉の研究は、江戸時代から継続的になされており、その意味や性格に関する研究史の蓄積は厚い。しかしながら、いままで論じられてきた勾玉研究の多くは、具体的な事例を比較・検討した結果、導き出されたものとは言い難い。また、勾玉の出現から終焉といった一連の流れを具体的な数値を提示しながら把握した研究もみられない。これらの問題点を解決するためには、実証的な事例を数多く、詳細に観察する必要があり、勾玉の出土数がある程度蓄積されてきた現段階において、それは可能であると考えている。考古学は精神文化的解釈を不得手としているが、モノゴトの起源を探る上で、時代的・地域的な変遷を具体的な資料にそくして、あとづける作業は必要であろう。

本研究の目的は勾玉を構成する各要素について、時間や地域を横断したマスデータの構築を通じてその普遍性・独自性を検討するとともに、日本列島における勾玉の全体像と、それをめぐる文化の一端を解明することにある。以下、本研究を構成する各章の概要について、述べていきたい。

第１章の「出土勾玉からみた時代的・地域的変遷と社会動態」では、日本列島から出土する勾玉を統一した視点をもってできうる限り集成し、従来の勾玉研究がそれほど積極的に行なってこなかった、消費地における勾玉の基礎的データの構築を列島規模で試みた。集成によって得られたのは、出土遺跡が 3,865 遺跡、出土点数が 20,796 点である。これらの資料を取り扱いながら、日本列島における勾玉の出現・発展・消滅を俯瞰するといった長期的な視野のもと、出土遺跡の数およびその分布、出土点数、材質、出土遺構に注目して、その変遷の把握を行なった。

その結果、勾玉の変遷過程については、８つの時期に区分することができることを指摘した。加えて、それぞれの時期にみられる勾玉の様相についても明らかにした。

第２章の「刻み目を有する勾玉について」では、次の第３章で取り上げる丁字頭勾玉が成立する以前、すなわち、縄文時代から弥生時代中期以前にみられる、頭部に刻み目が施されている勾玉を研究対象とする。この刻み目勾玉については研究の蓄積は多くはなく、東北地域・北陸地域に多く出土することや、ヒスイ製のものがあることなどが研究者の間で大まかな情報として共有される段階に留まっている。そこで、本章では、平面形態や刻み目の施され方などの違いから刻み目勾玉を４つの類型に大別し、分布の変遷や地域性などを検討した。その結果、日本列島から出土する刻み目勾玉は、縄文時代後・晩期に出現した後、弥生時代中期以降にはいると九州地域を中心に西日本で出土し続けるものと、弥生時代に入るとみられなくなるものとの２系統があることを明らかにした。

さらに、頭部に刻み目がみられる勾玉に視点を移し、以前から研究者らによって議論がなされていた流通に関して考察を加えた。縄文時代の東日本では、ヒスイ製で頭部に１ヶ所抉りが施され、平面形態がＬ字もしくはＪ字を呈するものが確認できる。このタイプの勾玉が、弥生時代中期になると九州地域に多く移入してくることを明らかにした。すなわち、頭部に刻み目が施された勾玉は複数の類型に分けられるが、そのうち特定の類型のものだけが東日本から九州地域へと時期を経て運ばれていたことを推測した。

第３章の「丁字頭勾玉の展開過程と地域性」では、日本列島から出土した丁字頭勾玉を集成し、弥生時代中期から奈良時代までを中心に長期的な視座のもと、その時期的変遷や地域的展開を追及した。そのうち、古墳時代の丁字頭勾玉について述べるならば、古墳時代前期には、丁字頭勾玉の分布や材質・出土状況で大きな変化がみられることを指摘した。その理由は、弥生時代後期・終末期の段階において北部九州地域や吉備地域でみられた丁字頭勾玉を副葬するといった風習を、古墳時代前期に入りヤマト政権が採り入れたためと考えた。その後、ヤマト政権は各地の首長層が丁字頭勾玉を副葬す

ることに規範を課し、それを守ることがヤマト政権に属することの象徴とみなしたのではと想定した。これは、従来の見解であるヒスイ製丁字頭勾玉がヤマト政権主導のもとで生産されて配布されたものという一元的な理解に対して新しい考えを提示したことになる。

また、古墳時代前期から後期にかけて、近畿地域を中心に丁字頭勾玉が副葬されるなかで、出雲地域・北部九州地域では異なった様相が確認できるとした。具体的には、ヤマト政権が列島内に向けて、丁字頭勾玉の副葬に関する規範の共有を課していたとするならば、それを行なわなかった出雲地域と、規範を受容しつつも弥生時代以来の習俗も残している北部九州地域の２つの地域には、各々の自立性をよみとれると考えた。

第４章の「背合わせ勾玉についての一考察」では、鳥取県米子市に在る博労町遺跡から出土した、２個の勾玉を背中合わせにしたようなかたちの遺物を研究対象としている。筆者は、このような形態をとる遺物について、「背合わせ勾玉」という名称を設定した。従来、背合わせ勾玉の類例品は、伝世の遺物や個人蔵のものが大半を占めていたため、考古学的研究の対象から外されていた。そのため、この遺物に関する研究史は、ほぼ皆無に等しいのが現状である。

本章では、まず、未だ類例が少ないながらも列島から出土している背合わせ勾玉の集成をおこない、分布や出土状況などの基礎的情報の提示をおこなった。そして、平面形が類似している立花や、複数の勾玉が連接している子持勾玉などの事例をふまえ、背合わせ勾玉の成立過程を検討した。

その結果、４世紀後半頃の近畿地域・山陰地域で背合わせ勾玉が成立したと考えた。その一方で、背合わせ勾玉の使用、ことさら勾玉を２個対にして用いることに、古墳時代の人々は、いったいどのような思いや効力を期待していたのかについて、考察を加えた。その結果、背合わせ勾玉には、勾玉が「分裂」することによる呪力の増強を第１義とし、祭祀行為を補強する役割を担っていたと考えた。

第５章の「土製勾玉に関する基礎的研究」では、従来、ほとんど研究の対象とされなかった土製勾玉に注目し、列島規模で土製勾玉の集成を行ない、縄文時代から中世までの長期的な視野のもと、時期的変遷や地域的展開を追及した。変遷の指標として分布・遺跡数および土製勾玉の形態的特徴や出土状況に着目した。

その結果、土製勾玉の変遷は５つの時期に区分することが妥当であるとした。具体的には、第１期（縄文時代早期から中期）、第２期（縄文時代後期から晩期）、第３期（弥生時代前期から古墳時代中期）、第４期（古墳時代後期から終末期）、第５期（奈良時代から平安時代）、第６期（中世）である。さらに、各時期にみられる地域性についても明らかにし、加えて、変遷過程をふまえながら土製勾玉の系譜からみた時代的連続性についても検討を行なった。その結果、土製勾玉の系譜には時代を跨いだ継続性を指摘することができ、このことから時代の変化という社会的状況に影響され難いことが考えられる。

結論の「日本列島における勾玉の消費が及ぼす文化的作用」では、第１章から第５章で提示した時期区分や時期差について、それぞれが整合性をもっているのかについて分析を試みた。加えて、出土勾玉の使用形態の変遷に注目していきながら、原始・古代の人びとに及ぼしたであろう文化的作用について検討を行ない、その特徴や大まかな流れというものを明らかにした。

これらのうち前者の成果について述べるならば、日本列島の消費地における勾玉の時期区分といった場合には、石製を中心とした勾玉の時期区分と、土製勾玉の時期区分といった２つの軸を想定できるとした。また、それぞれの軸は、時期によっては影響しあったり、あるいは、しなかったり、といったように複雑な関係性をもって存在していることが考えられる。また、別の視点から述べるならば、２つの軸とした時期区分は、いずれも縄文時代・弥生時代・古墳時代・奈良時代・平安時代などの政治的区分というフレームにそのまま全てあてはめて考えることはできないことを指摘した。